

2020/10/3-2

(うと Q 世話し 数式表現を使ってコロナ禍脱出をトライ あくまでトライアル その2)

前回の式の「今の経済活動」の正体が「モノの所有の満足」である仮定すると、それは物ですから容易に数値化できる訳です。数値化できるという事は同じく容易に自分と他人の優劣を比較できる事になります。

例えば「金銭の所有量」によって。

或いは「所有財産の数」によって。

ここに序列化が始まります。比較対照の上で、どちらが上位でどちらが下位かといった具合に。

或いは所有の有無の○×形式ではあり。是はなしとかでも。

この比較「対照」によって個々人の個性（差異）が、本来比較「対象」にならない筈の個々を、独立したものとして認める余裕がなくなり、お金、所有財産数にだけ目が行くことで同じ方向に走り出し、同じ方向故に単位面積当たりの人口密度が増え、限られた π の中で争いが激化、益々差異を許容しない傾向が強くなる悪循環に陥るようです。

もし、金銭保有量や財産保有数という単一の価値観以外にも他の価値観や尺度があれば、こういった争いは、なくなりほしないにせよ、選択肢が増えた分、各選択肢フィールド単位当たりの人口密度は減って、今よりは争いの数が減るか、争っても穏やかなものに落ち着く事になるような気がします。

つまり譬えて言えば

「同じ方向に枝が密集して光を求めるようになると、お互いがお互いを遮蔽し合って日射量が確保できなくなり立枯れてしまいますが、枝が各々の方向に分散し、拡がって伸びればお互いに邪魔することなく、十分な日射量が得られて相互に生き延びられる」という訳です。

恐らく地球様から「御叱り」を受けているのはこの部分、即ち

「モノやカネの数値にだけ目が行き、互いに優劣を競って争ってばかりいて、他の人間国や生物種族、生態系に全く目が向いていない事」に対してではないでしょうか。

嘗て、さる高貴なりし御方が

「和を以て貴としと為す」

とおっしゃられた時の、この「和」とは

「臭いものに蓋をしてなあなあでやりなさい」という意味では全くなく

「お互い足りない処は補い合い、足りる処は分け合う

と同時に更に磨いて延ばし合い、互敬相受惠なさい」

という「コラボ」の事をおっしゃられたような気がしております。

「和」という漢字は禾扁（のぎへん）に口と書きます。

禾扁は米を表すそうで、それを皆で分け合って口にする（食べる）事から「和」という文字になったのだそうで御座います。